

詩集

感情 粗く憔悴せる

横田 恭平

ひとひらの雪

ひとひらの雪のうつくしさ

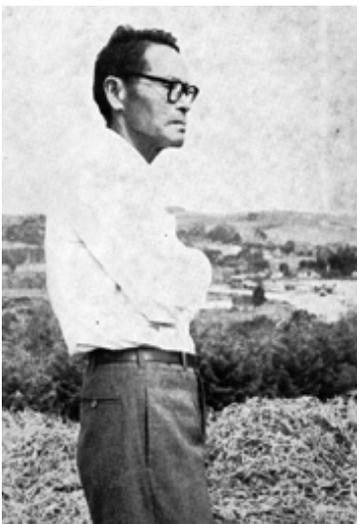
ひとひらの雪のたうとさ

空よりふり

地に消えてゆく

私のふるさとは北国の越後三条。

青年の頃のこの詩をこの熱国に住みついても捨て得ないのは、私の人生観、生命観を端的に表白しているからです。



自序

日本では見ることの出来ない野性の詩を作るため私はブラジルに来た。そして移民として内奥地を流浪しつゝ詩を生活し、作詩しつゞけて来た。

この詩集は、一九六一年当地に於て刊行した、大浦文雄氏との共著詩集「スザノ」以前の作品、内奥地生活時代から遡って初期作品に至る全部を網羅している。

初期の作品は、極めて単純素朴な、特異な抒情の形式を執った。この直裁なる表現方法ほ「感情、粗く憔悴せる」に至って放胆にしてむしろなげやりとも言える詩風にも結実し発表当時大方の共感をかち得たと信ずる。

かえりみれば、長い移民生活を通じて終始一貫、悲哀

の瞳をもつ放浪者の精神に於て身を処して来た。私の詩の基盤の底流をなすこの精神は、遠く少年篇「晴夜」及び「藤の花咲くころ」に萌兆することを心に留められたい。

最後に、畏友大浦氏がその独特の観点から筆を執られて、貴重なる跋文を寄せられたことを心から感謝する次第である。

横田恭平

目次

感情 粗く憔悴せる

私は諸君を最も愛することが出来る者だ……………

眼鏡……………

やけ土を耕す歌……………

彼、農夫……………

風景……………

樹……………

樹……………

樹……………

樹木仲間での奇術師

小さい男……………

幻樂を湧きながす市街地

日没と革の草履を穿く男

ぐみ……………

男

白雨、私の感情

壮年

壮年

暁……

時……

一つの豪壮なる風景

マモンの詩……………

六月の牧場……………

老移民の死……………

精励なるリッシヤの開花に就て

虫……………

イサ着陸……

星夜……………

風は荒れはてた私の頬を吹く

声なく、言葉なきものにも……

雲はどの方角からも走って来た

市街

帰路

人々は放つ、火を

乾燥初期……………

好む型……………

雲は湧く、随所に

溪はV字形である

夜、静かに……………

廃道を歩いている

森にて：

村……………

市街……………

イペ開花……………

旱魃の日に……………

エンシヤーダの道

川

開拓時代

風吹く夕ぐれに……………

あかるくランプをともし

おさな子……………

棉摘み……………

バタリアにて……………

カブラリア附近……………

瀟洒な家……………

満月……………

素朴な抒情……………

新やま……………

黒い雀……………

月怖い夜……………

春の使者……………

森際の収穫……………

はるみ……………

白い布袋を肩に……………

春の雨……………

片倉農場……………

棉に寄す……………

訪客……………

ベアード耕地

カフェザールから出て来たら

蟻……

没落風景

焚火する少年たち

珈琲採集……

山羊行……

暗い晩……

木枯……

霧の一夜……

乾燥終了

航海

神戸解纜（らん）……

うなばらを行く……

飛ぶ魚……

南方淡彩……

海辺幻想……

白雲のごとく……

シンガポールにて
印度洋にて……………
夕映……………
ケープタウンにて

北方の 追想

北方の追想：

幼年

吾がいとけなき日を
ふるさとの野へ
白い記憶…
幼き歌……………
遅々春日…
ほうき星…
鉄橋……………
春は……………
朝のかまど
春日行……………

ふるさとの

兄弟……………

憤怒……………

少年

発生…

松次…

好まず

秋祭り過ぎぬ…

純白賦……………

羅紗売り……………

…哀しき春……………

吾が瞳は……………

洪水記……………

だいまよう……………

野鳩……………

夕ぐれと私たち

晴夜……………

藤の花咲くこ

ろ校庭……………

与吉……………

青春

路地の人々

庭……………

野菊……………

約束……………

草いろもて…

青い雨……………

朝顔……………

はたちごころ

野葱と菜種…

こころなきものを

けら

赤きカンナの花咲ける村

訣別……………

東南の風が吹く日

与吉……………

朝の室……………

あなたと私

ひとみ……………

はなびら…

糸魚を釣る子が

永日唱……………

第一の収穫……………

梅雨明け……………

夏……………

父……………

童話の一頁……………

鼠が関……………

芽……………

初雪……………

からす……………

跋

大
浦
文
雄

感情

粗く憔悴せる

私は諸君を最も愛することが出来る者だ

太陽よ

もつとはげしく、私の筋肉を灼け

労働よ

お前ははがねのように優美に私の肉体を仕上げるだろう

動作はあざやかに

韻律にあれ

軽塵よ

あがれ

草よ

燃えろ

花粉よ

こぼれよ

小鳥は

私の肩に来てうたえ

さあ、やってくれ

私は諸君を最も愛することが出来る者だ

眼鏡

梢の葉のすがたをながめるとき

雲のすがたをながめるとき

それをもつとはつきり映したいためには私は眼鏡の位置を
正しくする

やけ土を耕す歌

このやけただるゝ真昼陽のひかりの中に
ほのめきあがる男ひとりの人間のちからに堪えがたく
私は私のはだか身を投げいだす

この脈うち奔るちからは一挺の鋤をふり上げふり下し
凝り沈んで寂念に収まり、激発して炎を息吹く
醜草に土くれにはねあがるひかりを制し

このくすぶれるちからはとろゝ身裡に燃えさかり
ちからはたちまち皮層にゆきわたり
灼ききたるもの、よし灼ききたれ
淋漓はだか身にしたたらし

あゝこのいのちはみなぎりはがねになれ
真昼陽のひかりの中になおかくしやくと溢れ散り
男ひとりの人間のちからは
ひとすじこのやけ土にしみこめつらぬけ

彼、農夫

彼は発芽を宝石よりも愛しむ

彼は太陽と雨を王者よりも尊敬する

彼は風や小鳥たちの音楽を知っている

彼は雲や日没の芸術を嘆賞する

彼は樹木や草と語る

彼は何よりも青空の下の自由を好む

彼は収穫の報酬に小児のごとく笑う

おゝ彼、土に活かるもの

農夫！

風景

雲は揚る

地平の涯てに

太陽は引火する

鳥なき風景を

大気は脈搏する
窒息の危殆に
かゝるとき

吾が心象激越して
石を割らんず

樹

樹よ

孤独なる樹よ

その膚に触るれば
なんと親しい

樹

樹にぶつかってゆく

がつつちと四股をふまえ

けもののようにちからを撓め

朴訥なる樹にぶつかってゆく

ゆり返してひびく

鬱々とはらわたにひびく

無言なるもの

さびしからんいのちひとつの

あゝそのひびき

樹

樹！

樹はもとより

その悲痛を言わず

その枝ぶりと

こまやかなる葉並を

ありありと空に映し

おのづからにろうたけぬ

樹は

厳肅におのれをまもるのあまり

はげしく

その仲間をさえ拒んでいるかに見える

樹よ

私はかなしい性（さが）を父母に承け

もの言わぬおんみを惻隠す

樹木仲間での奇術師

樹木仲間での奇術師は

丘の上の休閑地に生えている

痩せたエンバウーバ

白い上品な山羊皮の手袋から

仕立てあがった若葉を出してみせる

もひとつの白い手袋から

うまそうなお菓子の花房を出してみせる

手を拍って讚嘆する見物衆は

私 光 風

小さい男

夕方になると

きまつて軒下に椅子に休息して

茫ばくとして

空をながめたり

前の草原をながめたりしている

黒い小さい男はゴヤス生れなそうな

(注・ゴヤス州)

幻楽を湧きながす市街地

あゝこの熱帯の

雨期の

雲さえ重たい銀の怠惰に昏く

掌に

憂鬱の思い滲む

植物はほしいままになり果てた

マモナの如き強靱な作物は

厚い潤葉のかげに

赤い、実に淫靡な花をひらいて

交配を遂げる

この古い耕地は、どちらを向いても
世にも青いゆるやかな起伏が

目を痛ましめるばかり

彼方には衰退した市街地があり

赤い瓦、白い壁の隠現する木立の位置からは

この昏く輝く底切雲あまた飛行する風景のなかへ
嫋々と眩惑を誘う幻楽を湧きながしている

日没と革の草履を穿く男

日暮れに労働をやめて帰るとき

私は頭を直ぐにし、目をみはり

眼鏡を正しくし

疲れた神経をはっきりさせる

目に入る風景の

最も遠い涯てをながめる

森、畑、珈琲園

ユーカリの林、牧場、休閒の草地

柑橘に囲まれた赤いフランス瓦の家々

あゝ吾が住む田園は美しい

ゆるやかな起伏にそれらを点綴する私の視野は
昨日のごとく冷厳に、静謐に昏れてゆく

空には大きな雲のかたまりがあり

既のない太陽を反射し

自在に陰影をつくる

地にひそまるもの

なお空にうごくもの

一日の最後の利郡の詩が展げられる

その質朴、壮重の色彩を以て描かれた告別の詩に

私は共鳴し、讃嘆し、感激する

(毎日のことだが)

否、私は既に詩中の微かな一点景だ

汗くさい赤縞のカミーザを着て

エンシヤードを肩に

革の草履を穿き

流浪者のような足どりでと見こう見しつゝ

この自然溺愛者と自負する百姓は

暮靄の中、どこかの隅へ消えてなくなる

(注・シヤツ。鍬)

ぐみ

ぐみの葉は白し

その実赤くよみてちいさし

その渋く、ほのあまきを好めり

思え

秋たけて

ふるさとの石河原に

その実よみて敷かるゝごときを

男

男は路端に放尿していたが

私が近づくと終わった

「ボアタルデ」

と、気安く挨拶を交わして行き過ぎるとき

押し迫った夕闇の中に

男のからだから一入つよくパウダーリヨの樹の匂いを嗅いだ

男はカシンボをくわえ

引っかけた上衣の下に胸を露わし

水樽を提げて

草の上をぼそりぼそりと歩いて行った

(注。パイプ)

白雨、私の感情

白雨至る

沛然として

白雨至る

雨は空より湧きくんだり

声あげて

地に奔溢する

沈鬱な私の視野に伸び盛った風物は

どよめき、とりみだし

たちまち氾濫する

それは鬱積する思想を

押しながすかのようだ

それは擾々として

押し寄せ、押し寄せるかのようだ

私はそれらの豪快な意図をかんずる

私はけもののようなちからをかんずる

それは次第に身裡に荒れ廻り

ぶるゝと手足に行き互り

私は私の野性の歓喜を

生身に抱きしめる

押しつぶしてしまえ

吹払ってしまえ

あゝいま、

私は私の身裡に迫るちからにたえがたく

まはだかに雨をはじき

揺れ戦く樹々の下を走り行かんとする

壮年

午前八時

光りいよいよみなぎる

光りの中に放尿す

いばりは燦きて地に触れ

泌む、泌む

吾が生命の泌みこむごとく

あゝ柔軟なりし日は遠く
止むに止まれぬ真光りの中
粗野なる吾れにいまちからたぎり
ただ将として韻かんことを希求い
奮然鋏をつかむ

壮 年

吾が壮年は
落日の金粉の中
すでに疲労をかんじつゝ
地上に寄せあつめられた珈琲の実を
腕いっぱいのペネイラに抱えて起ち上る
支える指をしなやかにし
はづみをつけ
からだを伸ばし
一とふりまた一とふり
風なきに風を起し

なだれ落ち

またなだれ落ちる重圧に耐え

力を奔らせ

力を制め

思念は衷に冴えていよいよ沈痛となり

溪谷のせゝらぎを聴くごとく

風の樹木を訪うを聴くごとく

なだれ落ちるひびきを愛し

なお余裕を保って煽り

かくて華麗なる織情は

塵と埃りと共に地に帰した

終日のはげしい労働で

私の皮膚は塩を噴いた

砂塵は身体中にはりついた

むせかえり嗅ぐシスコの焦げた臭い

いやでも呼吸するポエイラ

ガツと吐きとばす泥の唾

けれど私は私の荒い仕事をやりとげる

寸秒狂わぬ操作

ぎりぎりの熟練

歯軌る力と意志

私は裸形の競技者のごとく

力を試みんとする意慾さえもつ

生活の悪戦に疲れたが

私はなお力の壮美を思う

動作に力こもるとき

優艶な韻律になることを思う

おゝ私を稀有の嘲諷家とわらいたまえ

私は力が、粗野なる力が鍛練された時

軽んぜられたる労働をも

最も高貴な芸術とさえ観ずる

冷え昏るゝ今日の陽への

はなむけの一と稼ぎ

見よ

ペネイラに得られた幾リツトルの珈琲実

実利主義者にとって、黒緑の寶石

私はいとも敬虔に袋の中へ収り入れる

(注・ペネイラ、篩)

暁

家長は深い睡りから覚めた

鶏の声が旺んに聞えてくる

森のむこうから、溪のむこうから

丘のむこうから

身を引き緊め心を奮いたたせるような鶏鳴

家長は起きてカンテラを点し

昨夜案じた一つの詩の短章を走り書いた

妻は疾く起きて厨でカフェを作っていた

やがて子供等が起きて来た

厨には頑丈な卓を据え

皆はそれをとりに困んだ

嵐気はひたひたと

この熱帯に属する内奥地の未明を浸した

暗いカンテラをめぐり

子供等は緊張していた

早く熱いカフェをのみ熱い麦粉の揚げを食べ

早くエンシヤーダを振って

労働に出ようと気構えていた

その意識でかちかちと歯を鳴らしていた

一番小さい子供までそうであった（注エンシヤーダ・鋏）

時

「時」は今

みどり滴る森の上

白銀色の飛行機になり

経過する

森にはイペの紅い花

かずかずの風媒花の萌黄いろ

時は流麗に

また端正に

無限の一駒を示して過ぎる

一つの豪壮なる風景

豪宕な雲団が、今し

眼前リオ・チエテのひらく低湿地帯を遡る

見よ、止まると見えて止まらず

澎湃として濤うち押しゆく大雨量

間断なく轟きはためく雷

大いなる意志をもつもの

幾十キロ平方の天と地を紫色に怒り

怪奇な形容の白竜さえたち騒いで

あゝ轆轤の響

はげしく地を撃つすがた

畏怖ならず

それを快として身は戦く

一粒の飛沫をも浴び得ない

平穩な傍觀者の位置をかなしみつゝ

これぞ自然の示す暴力のうたか

否々 最強者は荒々しく慟哭しつゝ

懲戒と愛撫の悲心を無限量にぶちまける

瞳若として

私はこの大自然の激情の前に頭を垂れる

マモンの詩

真摯なる態度で

新山に自生する一本のマモン

その巨大な果実は

どれ程私の家庭を湿したことか

私は親愛と感謝の念を以て

この植物の全霊に対す

マモンよ

風貌特異なる熱帯植物よ

君が分厚の潤葉と

累々と幹に実を成らすそのふりと

独創の気概に溢るゝ生命の力を讃えよう

私もまた一個の生物として

他の容喙を容るさざる独創の力で仕上げて来た

私は私の祖先の鏤骨の努力を知る

私は私の子孫のなおも受難すべきことを知る

一個の植物としてその稟性に従い

環境に順応して生存と繁殖の方式を改良し

向上せんとする意図をもつマモンよ

私の感情は君の感情に投合する

私は君を諒解し君の決意を讃嘆する

私は実に君の呼吸をさえ呼吸する

すなわち礼節を以て両の掌に

君が秘法の果実

多汁豊美なる一個を受取る

君が期待する耀かしい永劫の未来を含める重量を

(注マモン・パイヤ)

六月の牧場

湿地には

丈け低い灌木のわづかなかたまり

高地には、幾本かの

取り残された椰子樹の涼しいシルエツト

この牧はいま冬の最中

見渡す斜面はさんさんと陽を浴び
きれいに食い刈られた牧草の上に
幾百の牛群が今し立ち上る

手馴れに駒を馳せ違う二人の牧童
えいえいと声を発して

牛群は忽ちその前面に動き初める
もうもうと呼び交わして

黒、赤、白、斑

仔は親に添いつゝ

あ、種ゼブが先頭だ

見よ、牛群移動の大パノラマ

いつの間にか数列の縦隊になり

牧童は悠々と背後を載りゆく

丘を越えて

牛群は去る

取り残された静寂を裂いて

湿地にひびく水鳥の奇声

あゝこの牧場は冬の最中

あるじは光りと風

老移民の死

また一人の老移民が死んだ

雷に打たれたように

私は貧しい庭に咲いている花を一抱え持ち

お葬いに行く

ほんにいゝ人だった

沢山の子供を育て

酒好きで一生貧乏した

金は貯めなかったが樹を植えた

甜橘、マンガの類が繁りに繁り

その蔭にみな集って告別した

白い髯の牧師さんが

じろりと皆を見廻して声を励ます

「さて諸君

親愛なる兄弟は召された

今こそ諸君は死に就て

兄弟の召された神の国に就て

深く思いを致さねばならない」

あゝしかし、尽すべきことを尽して

死後になお如何なる大それたことを望もう

彼等は曾て自らの力で地上を天国たらしむべく

原生林の中へ身を擲つて苦闘した古強者

日頃はその手で愛する牧牛のうなじに短剣を刺し

肥豚の心臓を抉つて

大きく明らかな死との面接にいとまもなかつた

彼等はおのがじしの諦観を

周囲の自然から会得した

被等の死に対する態度は

むしろ淡々として逝く水のようなものではなかつたか

左様、また一人の老移民が死んだ

雷に打たれたように家族は泣いて嘆いている

世界は少しも變りない

變りない熱い陽光が樹々の梢に又乾いた路上にあつた

私たちは深い感慨に耽りながら

柩に従つてその路を行つた

精励なるリツシヤの開花に就いて

低地の再生林に族生する

無骨者の灌木リツシヤの精励を私は知る

長い乾燥期を彼等は隠忍した

だれにも気付かれずに

ひそかに青芽ぐんで待った

土壌中の湿度、温度

日々に地表にもたらされる気象の変化

また日照時間の測定に就て

彼等の毛根や枝頭の感覚は

如何に鋭敏で斉一であつたか

昨夜温暖の雨は地をうるおした

時は来た

今朝、彼等の一群は雪に埋もれたように

無数の真白の小花をその枝々に噴いた。

純白の装いのあまりの美事さに

蜂や虻が度を失って飛び廻っている

私は無骨者のリツシヤの精励を知る

それは種の繁栄への執念に基くことをも知る

しかもこのすがたは

不断の工夫と精励の凝った

彼等の芸術の開花とも言うべきでなからうか

時来つて、私は無骨者のリツシヤの

芸術の神韻に打たれた

最も放縦なる行為にして

清楚の感を与える

この天真爛漫は

樹木の社会に特有のものではなからうか

虫

百万年後の生命を考えながら

うっかりと歩いて

ふと耳をすますと

草原にはやはり虫が啼いている

懸命に啼いている

イサ 着 陸

昨夜の雨で膨軟になった土が

貪婪に熱い陽を吸っている

風は草の葉に死に絶え

小鳥は樹梢にかくし

陽の下に憐情の思い盈つ

十月の半ば

時刻は正午を少し廻る

なんの異変

見えねど

虚空にどよもす

と見る

力ある顛音を曳いて

交尾終ったサウバ蟻の新女王イサが

勇躍して着陸する

一匹、五匹、十匹いや幾百千匹

うすき翅ある

たくましく尻膨れたる虫けらが着陸する

未来の女王たるおのが宿命に驕るもの

(注・イサ、女王アリ)

翅をもぎとるももどかしく

早くその褐色の野心を地に潜めんと

掘る、掘る、せわしなく

熱い柔かい土を口に銜えて

一匹の虫けらを、その一念を畏怖する

見よ

地上の光輝はいましきそいあつまり

虫けらのすがたを

げにあざらけくする

星夜

夕食後

外に出て空を仰ぐ

星は降るように綺麗だ

家の中で、嬉々と

子供らは笑っている

年少い吾子は

今日遠い町へ出て繭を売り

値安く柄合よい布地など

幼い妹等に買い戻った

さゝやかなランプをめぐり

子供らは晶定めしつゝ

嬉々と笑っている

風は荒れはてた私の頬を吹く

風は荒れはてた私の頬を吹く

風は樹々の孤独をすどくして吹く

風は馬糞の匂いをはこんで

風は昆虫の羽よりも青く

風は不断に、

風は斜面に

目に見えぬエロージョンを作用して

あゝ彼方には野火はじまり

空ははにかんで

うすいけむりを刷いている

声なく、言葉なきものにも

声なく、言葉なきものにも

社会はある

私はそのひそやかな小径を

思索しながら散策する

そこに落ち散らばるは

私の肉体に閉じられた

幾世代の古い古い生存の記憶の

かなしくも正鵠なる片々

愛憐の想いに見返りつゝ

私はその小径を散策する

雲はどの方向からも走って来た

雲はどの方角からも走って来た

みだれ、千切れ、湧き、低く、疾く

薄墨いろの雲は、しぼるごとく

音たてゝ、粗い雨を奔らせた

と見る、彼方へ渡って

かなしいすがたに遠景を隠現する

雨はどの方角からも降って来た

亜熱帯の雨！

雨は森を潤し

棉やマンジョウカの畑を潤し

地に生きるすべての生きものたちの

いぶせき営みを潤した

あたたかく、わびしく

骨身に徹した

みんな雨のわづかな断れ目にも働いた

小さな蟻のようなものまで。

私たちは雫のたれる衣服のまゝ
フオゴンの傍に佇んで熱いカフェを摂り
また黙々と畑に出た

市街

市街は整然として晩景を映発した

市街は直ちに起伏する耕地につゞき

疲労した余情がその空に揺曳した

私は高台から展望し

塵のごとく夕映の中に消える

小鳥の心を感じた

市街よ

君が繁栄せる一日は終った

明日はまたこゝに生きる人々にとって

ゆるぎなき態度で招かれるであろう

曾て森林を拓いて

この市街を創めた一群の人々があつた

彼等がかゝる動かすべからざる規矩をもつ

黄昏のうつくしさを描いたであろうか
時の経過ほ安易を生み

習慣に疎んだ

発明なる人々は商業と工業を行い

娯楽や飲食の店が開かれて

利潤を目指す。

あの明るい家々に

それぞれの生活は保たれ

因習によりかかっている

誰かこの秩序ある集団の営みの上に

没落の悪しき予想を持ち得よう

おゝ卓越せるもの

人生の市街

私はいとも不思議なその性格を考える

見よ、遠く耕地の彼方空際に

積乱雲が蜂起し

落日を映えている

華麗な又は豪壮な思想のように

しかも人々にとって何のかゝわりのない眺めである

彼等は今日もまた小鳥のような愛情を携えて

各々のさゝやかな時へ急いでいる

帰路

入り陽の光りはなお

斜面に深々と溜れど

冷えは次第に湿地より這いのぼり

露れし膚を刺す

吾等が日々に期待するは

兇事（まがごと）のみ

そは今日も来らざりし

ひねもす珈琲の実をしごき

掌を染めて帰る

吾が家路の上に

玻璃のごとき空あり

人々は放つ、火を

人々は放つ

火を

飽くない焚掠の思いに憑かれて

燃える

夜に、日に

原始林、牧場予定地、休閑地

けむりほ空に地に満ち

けむりの奥になお膿のごとく

けむりは噴きのぼる

災敗のきざし、陽も失われ

永くきびしい旱燥の下

草木は焦げ

人は困憊し

荒める思想に倦む

大地は勇気もて苦悩に耐えるごとく

静かに横たわる

あゝすさまじいこの炎焼も

内奥の自然の一つの姿でしかなかつたか
けむりの奥で、小鳥たちは

事もなげに儲舌であり

桑の実はひそかに菓蔭で熟んでゆく

見よ

彼方の草原

けむりの中を裸馬を奔らせる悪たれは

吾が子だ！

早燥初期

珈琲の実が

ぞつくり赤い桜んぼになった

大豆畑は黄色になり果てた

棉畑に棉は白く噴き

ミイリヨ畑にミイリヨは熟して枯れ

見渡す丘々の斜面は雑多な

いとも素朴な色調で彩られた

慎ましくしずかなるよろこびは彼処に盈つ

君よ

親しむべき田園の徳操は彼処にある

人々の胸はただ

溫柔の陽ざしを慈しむ思いでいっぱいだ

あゝいまほ早燥期のはじめ

空ははるかにひらかれ

そのはるかより

風は翩翩とひるがえし来つて去る

好む型

たとえば

寛潤な路上で

一人の男に会う

粗末な労働のカミーズを着て

色褪せた中折を無雑作にかむり

赫ら顔の

がっしりした壮漢

堂々と歩いてくる素暗しい奴

反射的に私は腹に力をこめ

身を反らし

ひたと目礼を交わす

威あつて猛からざる奴

思いやりが溢れている

颯爽と行き過ぎる

かゝる男こそ私の好める型

かゝる男はざらにない

いやかゝる男はざらにある

信義はかゝる男にこそ

求め得らるゝものではないか

雲は湧く、随所に

雲は湧く

随所に

雲は離合し

集散する

地は湿りを帯びて

熱く炎めき

素迅く乾いてゆく

ものの陰影あまり鮮やかに

雲の底みな昏く重い銀色に輝う刹那

飽くない欲情を潜めて地は蒼み

地に剛毅なるものみな焦だつ

呼吸荒く喘ぎつゝ

蛆のようなもの

蟻のようなもの

しきりに軟土をむくれあげ

むずむずと吾が皮膚を苛立たしくする

しかも生ぬるく憐愍なるセンチメントは

もはや吾が傷感し易い脾腹に耐え難い重量となり

地に沈みたい

なにごとか究まらんとする

なにものか廃れ去らんとする

燦きまた翳りしんしんとひそまるものゝ中

あゝこの時

悲哀は虚空を奔り

たちまち見えざる擾乱は起つた

反動し来る気圧は快い緊迫を与え

見よ凝集せんと意図するもの

薄墨いろの大いなる目をつくつて

凝集し始めた

目の中に水けむりさわぎ

はげしく声あげて

今ぞ

燃える地に漑ぐ

溪はV字形である

溪はV字形である

寛潤な斜面はその両側に

半ば原始林のまゝ

遠く内奥に向ってひらかれている

溪の展望はいつも私に

過去及び未来に就て

若干の感傷を与える

私はこの豊穡な地域に根を下す多くの動植物の

無限にその種を繁栄せしめんとする野望を

あきらめの限界でながめる

たがいに反撥しつゝ

しんしんとして

それらは繁殖と進化の道程にある

見よ

彼方に呼吸づく青い生命は

ことごとく質朴なる性の具現である

吹きぬける古くまた新しい性の風

性のくされ

性の萌える匂い

鳥は性を囀り

虫は性をすたく

あゝ自然のいとも複雑にして

むしろ神秘的な表情でさえも

詮ずれば

生物の性の発展の現象の然らしめるに過ぎまい

何をか哀しもう

止むに止まれぬ生命の因果を省察するからに

自然の一分子としてかくも度ましごころである私

吹きながす性の風に洗われて

心象はすゞしく透きとおり

散生するエソバウーバの木の葉蔭に

青い果房をもとめて

滴る性の蜜のあまきを愛す

夜、静かに

夜、静かに

雨降り出でる

やさしく

あたたかく

母の添乳にねむるごと

おゝあなうらの快さ

毛穴より泌む

慈愛の匂い

今宵、草木もその肌に

喚び起すらんか

幾億万年のむかし

あたたかく絶え間ない雨の下

初めて地上に萌え出でしかすかなる生命の

そのかすかなる記憶

廃道を歩いている

遠く市邑をはなれ

行くほどに丈を没する草地の中

一筋の廃道を歩いていく

すがれはてた荒蕪地や

風そよぐ野草の間

又は手人の行届かぬ牧場を過ぎる

ひっそりとした道

繁栄する珈琲園が

はるかかの丘陵に連って見える

白い市街が見える

なつかしい人生の市街

それらを遠くながめて飄々と歩くことは

なんと興味多いことだろう

この廃道には一軒の家も見当らぬ

一輪の花も見えぬ

しかも至るところに鳥声は聞え

陽光は寂もり

風はそうそうと粗野である私の髪を払う

森や流れや

とりどりの趣をもつ斜面が

いとど親しく私を迎える

一人の男に会う

彼は放浪を職能とする若いカマラダ

彼もまた独り歩行するを楽しむ習性をもつか

吾等は暫く立ち止まって

天候や作物の出来や物価に就て語り

彼は煙草の火を乞うたが私は持たない

雲煙の彼方に志す青年は

草の中へ消えて行った

あゝ彼が愛人と故郷を見出すのは

何日何処であらう

陽はもはや午後へ廻ったのであろう
私の道もまた半ばを過ぎ軽い疲労があった
道はおもむろになだらかな傾斜をつくり
ふり返れば過ぎ来し方はいとも鮮やかに
風景の襞を重ねて指呼せられ
再びそちらへ歩いて行ってみたい衝動をかんずるので
あった

(注・カマラダ農場労働者)

森にて

幾年を経た樹々であろう
森の傍に立ってながめると
樹々はみなそれぞれのふりをつくって
静まっている

密生であるからに
樹々はその枝を組み交わし
幹を真直にし
なお他に抜きいでようとしている

幼い樹々もある

その幹は細く、白く、直に

根ははや苔蒸して

蔓は樹々にからみ

枝葉をはびこり

その蔭を暗くおそろしくする

枝もたぬ椰子の樹の幹の其直さ

細く、高く、樹々に抜きいで

天辺に葉をしげらせ

累々と青い実粒をならせている

風が吹く

かなしい樹樹は

その枝を組み交わし

細長い幹を真底から揺りゆする

村

とある村に就て語ろう

その人々の家屋は

粗末ながら堅牢をきわめた

柱、土台には

直ぐなる素のアルエーラ樹の削り

壁板には分厚のペローバの製材

屋根は赤いフランス瓦の緩やかな傾斜

家の前には一様に竹の叢とマンガ樹の数本

若干の柑橘

そうした雅致ある住宅も

年々打ちつゞく早魅に因る

不作で心ならずも放棄された

道路は荒れ

道べの雑草には無数の赤だにが発生した

邪心に黒い小鳥たちが嘲笑を浴びせた

家長等は咳入りつゝ

淋しい夜道を

古いランプを提げて集会した

衰退した市街地には

午後になると、都邑に通ずる路を

蒼惶として一台のオニブスが入ってくる

一軒の酒場の前に停って

疲労した表情の幾人を放出する

沈滞の街にひとしきり

うらがなしい動揺めきを残して

乗合は次の村へ去る

かゝる時

頹廢の黄ばんだ情緒が

一面に街上にながれた

この小さい市街地には

不思議にいつも佗しい音楽が漂っている

花も緑もまた裸かの時も美しいハイネーラの大木のある

小学校

製材所、薬局、産業組合、珈琲精選所

先人の遺志のとどまったこれらの建築をめぐり

いまだに友愛にむすばれる古く純朴な感情がながれて

いるというのか

或はそれらの建設に意図せるものが

予期の発展もなく

もはや衰微に傾かんとする運命の暗示か

戎ほ又、茫漠と痴呆のごとく起伏する耕地を周囲にめぐらせて

はげしい自然の呵責に拮抗しつゝ永らえようとする
自負強く情篤い人々に寄せる私の感懐に由来するか

一日、部落の外れにつくられたさゝやかな芝生で運動会
を見た

格子模様の日傘が蝶のようにつゝましく並び
多くの青少年が雄々しく振舞っていた

みな訛り多い父母の国の言葉を発音した
鼓舞するとき楽隊はあつたが

それにかゝわりなく
じつにものがなしい音楽が
こゝにも一画にながれていた

(注・オニブス・バス)

市街

停車場は、四辺を広く空けはなし

やゝ小高い位置から

市街を見下す

真新しい

まだ塗られてない教会の尖塔をめぐり

うらわかい赤い屋根の建築が群れ

これは昨日出来た市街

規律と秩序はおのづからに森の中から生れ

すでに曾ての殺伐は失われた

なお巨大な建築が目論まれ

整然たる道路は

耕地に向って開かれている

この市街を繞る展望は

珈琲や棉花の農地の膨大なみどりのひといろ

怠惰な起伏が雲煙につらなつて

素裸な太陽の下

これはまだかざりなく、翳りもなく

むきだしに実用の必需の品を並べたような街
新しい生産地帯の常として

セツコス・エ・モリヤードの店が軒を連ねる

あらゆる雑貨喪具類から

乾肉、豚脂、塩鱈

石油、穀類、麵類、玉ねぎ、にんにく

丈夫な労働用綿布から

華美な柄物まで取揃えて

耕地から乗合自動車に着く毎に

それらの店に群る人は増す・

人々は素朴な風采で

白い布の袋を携え

その充たされるまで必要品を買込むだろう

それら商家の間に挟まる狭雑なけれど安易な飲食店は

荒々しく飲み、食い、高声で話し

哄笑するむくつけき男らでいっぱいだ

右往左往する人々になんと多い日本人

彼等はすっかりこの国の民衆の一員になり切って

自信に満ちている

商舗、バール、農産物仲買、ホテル、写真師、歯科医から

乗合自動車の運転士まで日系だ

拡声器はがむしやらに広告を放送するかと思うと
たちまち日本音曲の甘たるい旋律

四つ角に、日本の文字で立札

×月×日開催のど自慢大会

物資を満載し、又は空で

砂挨りをあげ疾駆し去り又来る大型小型の貨物自動車

街景はそんなにもざっぱくでむしろ殺風景であるが

不思議に希望を孕む

こゝでは女々しい追想や感傷はすがたを消し

代つて勇氣、そして冒険心が登場する

よろめくものは置き去られるだろう

正午

のびやかに汽笛を鳴らして

小高い停車場から

汽車は西へ出発する

薪を焚く機関車がそこばくの車輛を曳いて

だだ広い辺境の方へ

マット・グロツソ州へ

あまり遠くはるかに

二本の軌条を慕ってゆくので

一抹の哀愁さえとりのこされる

人々は急に憂鬱になり

やがて街々は仕様の無い倦怠に襲われる

何も彼もいやになったように

乱雑、怠情、なげやりの時刻がはじまる

黒い警羅さえ、だらしない恰好で

油を売って歩くのです

自動車は登録番号を光らせて

街路に置き去られる

熱帯の灼くような陽射しを

斜めに受けて、街角には

悠々としてたばこを巻き

雑談する人ばかり

また呼売りするバナナ、蜜柑を立食う人々

彼等は鰐広の幅子をかむり

荒い頬に最も親しみ深い笑いを浮べ

誰にも話しかける

少年らはしきりに落花生を噛み

事もなげに唾を吐き

また仔細らしく大人の会話に耳を傾ける

やがて

酔い萎えた身体を馬上に支えて去りゆく人がある

乗合自動車は挨りだらけの車体を曳摺り

疲れた表情の乗客を閉じこめて

青い耕地の方へ

街景は次第に頹廃し凋落し

棄てられた食物のかけに集まる蠅共の去らうともせず

物憂いかぎりの想いに盈ちて午後は蘭ける

イペ 開花

一夜は自いけむりの中に明け

あたたかい、湿った空気の中で明け

と見る

牧の中の

きのうまで乞食のようにすがれはてた

イペの木の変身

万朶の黄花を飾り

耀やくような景色をつくっている

この色、軽薄ならず、孤ならず

しかもはつきりと

光りを撥ねる

東洋の哲人の好める彩

私はむしろ内面の金剛を見る

幾度かながめて嘆息する

丘の上で見渡すと

森の中にも咲いている

惜しまれて伐り残されたのであろう

遠くの方にも畑や牧場の中で咲いている

旱魃の日に

今日で幾日降らぬだろう

雨期だというのに

毎日この灼けたぐれる旱燥

風は威丈高に

凄じい熱気で地を撫で

空には鈍色の不吉な雲

どちらを見ても雨の気はない

空は病気になった

休閑地の頑強な雑草まで

生色を失った

その中に無数の醜悪の尺取虫が発生した

虫共を食べ倦きた

アヌー、パッサロプレット、自羽鳥の群

嘲弄するように

時々どつとはやしたてる

作物はどうなるのだろう

落花生の葉さえ萎え白んだ

ムクナーナも力なく白い葉を返している

ミイリヨも駄目らしい

棉は？ 稲は？

不作、貧困！

あゝ職分を尽くして酬いられぬことは

乏しい吾等の生活にのみあり得ることか

吾等雨を希って空を呪い

身も心も病みつかれた

かゝる時、吾等土に在るものに

せめて樹木のごとき悲痛なる無言だけあつた

吾等は萎えた二本の足で

痩せ犬のように熱い土の上をうなだれ歩いた

エンシャーダの道

(注・鋏)

エンシャーダの道に於て

私は或る境地に達し得たかも知れぬ

むかし深く腰を沈めるとき

丈なす雑草の中にその刃を進めることは

屈強のバイア人に後れをとらなかつた

いま私にそのかみの強引さは失われた

力を以て覇を称えようとはすでに思わない

最も軽い柄を選び

流汗しつゝ

何の慾得もなく

しづかに無心に曳き捌く

力はおのづからリズムをつくり

よく音楽にあたり

雑草は敢えなく倒れる

何たる恍惚

仕事に恍惚つゝ

私の細い注意はいつも地表にあるけれど

頭上を過ぎる飛行機は

仰がずとも歴然と心に影を落す

光り、音、風のそよぎ

私の無心は自在にそれを吸収する

無頼の私は武蔵の諦観に近づこうとは思はないが

少くとも私の剣、いやさエンシヤードは

忍従慈悲の刃である

少くとも私の生活態度は

このエンシヤードの捌きに象られる

見よ、二羽のアヌーが飛び交いつゝ

推しすゝめる刃にからまって

恐れ気もなく虫を拾っている

川

原始林の緑が

やゝくすみ寄ると走りころんで

牛群の屯する傾斜の

いちばん低い境

美しく拓かれた斜面の

ながるゝごとく蒐まるあたり

川はいと細く

しなやかに迂余しつゝながれる

少年らの思想のごとく

ゆく手はるかなる内奥に大河流れ

気性猛き魚棲む

人稀れに野性は遊蕩

あゝその陽の凜烈

星と樹皮の清潔

花、鳥、虫けら、けものたちの

単純にして胸痛むロマンセ

亜熱帯の自然の青臭い生命の息吹を嗅ぎつゝ

川よ

さらに壮麗なる饗宴を夢みて
遠くながれゆくか

川よ

地域的感傷を身につけぬ

不敵の冒険者よ

少（わか）き想いの赴くまゝに行け

私は父なる太陽、母なる大地に

あまやかされ過ぎた放埒者

この邦に大いなる詩と自然を求め来て

苦難に憔悴せる移民の果て

俯瞰する丘に土着し

朝に雲の性格を読み

午、掌に雨量をはかる

未知は私にとって、なお不断の誘惑ながら

すでに草動かぬ大落日の中の終焉を思う

昔日住める土族の首長のなせるごと

手を翳し

視野のかぎり、君が流れゆく方を望んで

思いを叙べる

開拓時代・・・

風吹く夕ぐれに

どこかで、不時の炎焼があるらしい
墨いろの生温い烈風だ

夕闇に

真黒い雨雲さえ混って

得たいの知れぬ空模様ではないか

荒れ果てた

コロニアの長屋裏の空地

たった一本葉を茂げらせて

すつくと立つマモンの木

(その実は野菜に乏しいこのころに

みな青いうちにもがれてしまった)

木の下で空をながめながら

私は黒人たちと会話する

気象の変化に就ての経験と予想など

吹きつもの

きなくさいつむじ風

ぼうぼうと粗野である私たちの髪を吹きまくる

私たちは談話を高声にし

それらのことは

奇怪にして涼蓼たる

風吹く夕ぐれの景色を形づくってしまった

あかるくランプをともし

あかるくランプをともし

播種用の落花生を割る

あけ放した窓の外

絹糸のように雨が光る

あたたかい春の夜

殻を去った落花生の種子共は

一つ一つもうしめりを感じて

ひそやかにうす皮をかがやかしている

雨は今宵中降り適すか

静かな夜を夜なべにいそしむ私たちの耳に

丘の上の地主の家から

花やかなラヂオの音楽が聴えてくる

ピラチニンガ市 ボア・ヴィスタ耕地

おさな子

棉の木はきれいな赤い花白い花を咲かせ

棉の木の葉蔭でおさな子はあそんでいる

おさな子はきれいな赤い花白い花を見ない

青い葉っぱをちぎってみたり

土くれを撒いてみたり

なにかぶつぶつ言いながら

ひとりであそんでいる

棉摘み

棉を摘んでいたら

日溜りにねていた朽葉いろのいなごが

かさこそと逃げてゆく

ふるさとの小春の日和にも似て

やわらかな白い光りが野に充ちている

かゝる日、棉作りにも

はるかな郷愁がある

郷愁はそうそうとして

吹きながす風よりもすゞしい

棉はひとひらはひとひらよりやわらかく清く

てのひらにすくわれてゆく

バタリアにて

バタリアの野辺に

棉の実白う咲き

丘々を霞み

四月の風吹く

丘を越え来りて

また新しき丘をめぐるよ

丘はゆるやかに風景をとりかこみ

森と家と果実と

また家畜とひかりに浮けり

バウル市はなお遠きや

吾等がゆるき散策の径

たのしければ言わず

みちばたに粉のごとく

草の実はじけたり

作者註 サンパウロ州棉作勃興期にバタリア附近に集りたる日本移民八百家族と称さる

カブラリア附近

丘を越えると

また青い野原がひらける

高地の傾斜には

珈琲園にかこまれ

白亜の住宅

牧場には、牛馬があそんでいる

そのつながりの青い棉畑の中には

サツペ茸の小屋が建っている

周囲には赤い草花など見える

日本人の棉作者が住むのであろう

路は速くカブラリアにつゞき

真昼の光りの下

次の丘への登路が

もう行手に赤く、はつきり示されている

(注・このあたりは赤土)

瀟洒な家

市邑に通う街道筋の原生林

その深い木立が少しづつ伐り倒されて

焼かれたのは去年のこと

焼け跡にはミイリヨやフェジョンが

蒔かれて収り入れられた

今日久しぶりに通ったら

ずっと奥の小高いところに

赤檜いろに塗られた瀟洒な家が建てられて

明るいヴェランダには、椅子にかけて

たばこをのんでいる人が見える

まだ早い時刻で

鶏共が女のひとから餌を貰っている

からからと井戸から水を汲む音もする

犬が威勢よく駆け廻っている

畑は果樹を仕立てるらしく

整然と間取りされて

掘られたコーバの中に

バナナの苗が植えつけてある

満 月

お月さまが出るよ と

幼な等がよろこんで呼ぶ

家の前に立って見ていると

うすぐらい空の涯てが黄いろく染って

やがて団々たる月の出である

満月である

開拓地域は前面に傾斜して

その果ての湿地にも

はや光りが行き亘るか

いろいろの鳥が賑やかに歌い始めた

ほろほろと野鳩の声も交っている

素朴な抒情

家のかたわらに

ミイリヨの小屋と

マモンの木が二本

そのあたりに白い山羊がつながれている
ありふれた新開地の景色だが

西の空に

うらわかい月が

金星を伴ってかゝり

星々が数限りなく瞬く下にながめると
なんと胸ふくらむ

抒情の絵

(注・トウモロコシ、パイア)

新やま

樹の根だらけの新やまに
子供らと蒔いた稲が
ぞっくり芽を出した

青い針尖を揃えて
もう見事に列をつくっている

子供らは歩きまわってほめたたえている

黒い雀

黒い雀のパスサプレット
ひねもす私の畑で
粃をほぢくり
さびしい日ぐれになれば
ぴいぽうと啼いて
むここの藪へ帰ってゆく

月怖しい夜

月怖しい夜

邪悪に口吻とがり

ガンバは吾が家の鶏を窺った

三つ巴の残忍が行われた

私は主役を勤めた

黒と白二色の奸計の皮を着込んだガンバは
血を吐いて死んだ

雲迅く

月怖しい夜

春の使者

では昨夜

ひとしきり南の方から吹いたあの烈風が
画然と冬を区切って行ったものであろうか
今日、丘々のなだらかな連りの涯てまでも
やわらかな靄がたちこめて

大気はぬるく

小川に水を飲むために湿地を横切ったら

これは春の最初の使者であるか

めずらしい小鳥が一羽灌木にとまって

しきりにあたりをながめている

森際の収穫

陽光涼しい

原始林の切口

今日、子等が嬉々として収穫するのは

丈高い樹木にからみつかせて

無数の莢を下げたファーバ

割れば碁石に似た白い扁豆がほじけ出る

森の中を覗けば

光りが透いて

風吹くまゝに梢にそよぐ葉 葉

その鮮麗

その光耀

枯葉の滞った地面を

美麗な青とかげが

疑いぶかく見返りつゝ逃げてゆく

絶えぬ小鳥たちのするどい呼声

ああ言葉なきものの社会のひそけさ

こゝには色とりどりなる哲学はない

自然の純真があるばかり

この閑寂の境に在って何を思わう

しばらく人界の悩みを忘れて

思想を爽やかにして了った

はるみ

月がのぼったので

はるみを抱いて外へ出てみる

はるみはまだしゃべれないが

お月さまは？　ときくと

ん、ん、と月を指す

白い雲もあつて

なんといゝ晩だろう

黒いマモソの樹の象も

バナナの潤い某のふりも

またいゝではないか

向いの珈琲園の

かぐろい奥で

虫がしんしんと啼き出した

白い布袋を肩に

八月八日

珈琲の収穫を終る

身も心も軽く

白い布袋を肩に

市街地へ干肉を買いにゆく

春の雨

春の雨があさくふる

九月の雨が

牧場の草のいろも育み

家々を埋めて

珈琲の花咲く九月

マモンの潤葉を折り

子等その青い柄もて笛をつくり

ひようと吹き鳴らす

(注・ブラジルの九月は日本の三月にあたる)

片倉農場

片倉農場の

ひろき牧場の

草滋る丘の上

椰子の木いくつか立ちならぶ

椰子の木はいつもみどりのひろ葉を風に吹きながし

その花ふさはいつしかに白う咲いて垂れさがり

その青き実ふさはつきつぎに黄いろく熟れ

その小粒の黄いろ実のあまさを知るは

羽青くおしゃべりのペリキツト

すばしこく木のぼる小さきけものたち

また裸足なる人間の子

さればそがかげに

おのづからなるみちありて

吾れまたひとりそを行きてたたずみ

愚鈍なる牛群をながめて呆(うつ)けたり

棉に寄す

陽はいま入日

ものみなすきとおる

あかるさ、かなしさ

まだほのあたたかさを湛えて

その最後の日かげをも掬わうと

その茎しやんと伸びあがり

その葉ぶり斜めにそびやかし

あゝこの日光を愛する棉共

幾万の棉共の、その一本一本がいつしんに努めているそのすがたは

訪客

訪客は

寸鉄詩作者と名乗った

暗いランプを挟んで相對するや先づ

天地創造の際拾ったという

塊麗な石を示した

私は一瞥して

これの莊嚴は

正しく世界終焉の時のものと主張した

私たちがほひどく憔悴していたが

お互の穎氣をかんじた

抄くとも根本の問題を論じた

道を求めるには

神仏をも蹴とばさねはと

訪客は声をはげました

この痛烈は寸鉄詩作者のものだと

私は感心した

戸外は暗かった

寸鉄詩作者はランプの提供を辞し

勘の強い武蔵になり

無構えの恰好で

すたすたと闇に消えた

芳賀裸人大人に呈す

ベアード耕地

(パウリスタ線ピラチニンガ駅)

自一九三三年六月四日

カフェザールから出て来たら

カフェザールから出て来たら

いつの間にか

雑草の実が身体いちめんについている

丸いのや尖ったのが

まるで生きもののようにしっかりとくっついてる

(注・珈琲園)

蟻

巢を毀された蟻は怒って
まるで逆立ちになって
私の腕に噛みついた
私は苦笑してつぶした

没落風景

とり出された煉瓦工場の跡に
煉瓦のかけが散らばって
今朝はそのあたりに馬が二匹あそんでいる
みちのべのパイネイラの大樹
そのたけ高いみどりは風に払われ
あゝ うらゝかにパイネイラ
うす桃いろの花散りそめ
馬はすゞしく尾を払っている

焚火する少年たち

満天の星座である

星は水のように冷気を降らした

コロニアの広場で

今宵も少年たちは焚火するのだ

炎々とミイリヨの殻は燃え

赤々と炎に照り出されて

この世界の涯てから集った少年たちは

どんなロビンソンの冒険を物語るだろう

珈琲採集

枝頭の黒く乾いた実は棒で叩き落す
赤い実青い実は

青葉と一緒に素手でこき落す

バラ バラ バラ

実粒は散乱し

見る見る地上に堆積する

やわらかな白光の中で

珈琲収穫作業が進捗する

空は深い藍、高くウルブが舞い

微風は乾燥期のさわやかな微風だ

イタリアの若者はイタリアの唄を

スペインの少女はスペインの唄をうたった

若い娘たちが絶えず会話の中心になり

随処に愉しげな笑声が湧いた

(注・ウルブ・秃鷹)

山羊行

坂の上で、山羊はめいと啼いた

青草を食うてまた啼いた

俯瞰すれば

青い牧場の中にコロニアの家々が並び

私は今しがたそこに住むスペイン人から

滋味な乳を与える山羊の親仔を買って来た

とぼとぼと私に曳かれる山羊よ

世にも溫柔な限差をして草を食みつつ哀しいのであるか
振り返ってしきりにめいと啼き仔は親により添う

陽はなお高く 爽快な風が吹き

私の胸は愛児のために可憐な家畜を得た喜びにみちて居
たが暫く仔んで彼女の傷心に思いを傾けた

暗い晩

月も星もない暗い晩

遠くの方で稲妻が光る

コロニアではもうどの家も戸を閉めて

中でぽつぽつ話声がする

暗い砂道を踏んで

泉に水汲みに来たら

草むらを掠めて螢がとび

ずいずいと虫が啼いてさびしいことだ

木 枯

木枯。

夜更けて床に目覚めてきく

さあさあと

草葉も人の心も凍らせてすぎるけざむさ

軒ばたにねむる家畜たちが

かそひそと身を寄せ合う気配

あの溫柔の生きものたちが

私たちと私たちの家にも愛情をもち得て

このさむしい夜を軒ばにねむることは

なんとなくまもられているようで

それは慣わしとはいえうれしく

側隠のこゝろをさえもつのである

霧の一夜

霧が降る

霧が降る月夜の白い彷徨者は山羊君

今晚は

孤独にして沈痛なる紳士よ

ぽくらの散歩はお互いにすっかり冷いものを浴びて了つたね

見たまえ

コロニアは家も地面も白う濡れそぼち

あちら乾燥場の大電燈が

なんと哀しげに模糊として光芒を放っていること

こんな晩に、きみぼく

哲学者のように思索をみがきすまし

素晴らしい発端を按じて静寂を歩いている

乾燥終了

今日、落日はうすく煙り

やわらかな鈍い光茫を空一面に放った

永い乾燥の後の降雨を人々は予知した

ロツサされてあつた野菜圃の芥は

大急ぎで焼かれた

森の彼方で

遠くの丘の方で

旺んに煙りがたちのぼった

夜になると、コロニアの原っぱでも

えんえんと火が燃えあがり

作業する人々のすがたが

炎の中に絵のように浮きだされた

(コロニア・集団地)

航海

神戸解纜

どんよりと港がくもり

午後のうすい陽翳が

六甲の山なみをうら哀しく煙らせている
風やゝに強い。波がしらにあそんでいる
若い海鴉たちを斜めにまいあがらせて

白い移民船リオデジャネイロ丸の

埠頭出発だ

はるかに白雲の極み、南を指してゆく

故国よ

うつくしい山河よ

そこにやさしかったひとよ

いつの日か復た相見よう

愛憐の情は潮のごとくにして
すでに私に別離のなみだはない
見よ

吾等が船の跡に滯の流れ漸く疾く
そが涯てに遠く過ぎ去つて
おんみ等が老ゆるに任せよう

一九三二年四月十八日

うなばらを行く

うなばらを行く私たちゆえに
ある日は甲板に立って
こゝろゆくまで雲のすがたをながめる
また波のありさまをながめる
雲はしばらくもとどまらぬけれど
その色合を波に映してゆく

飛ぶ魚

飛ぶ魚は

青く光り

わが童心のよろこびに

青蟬のようにかがやいた

南方淡彩

みなとが近づいたので

私たちは白い服装を着けた

海は次第におだやかになり

海軟風の吹きよせるところ

うすむらさきの島々が見える

島はいちめんりに青い苔に蔽われて

樹木のすがたもない

鳥さえあそばぬ簡素な島影をめぐって

赤い帆をかゝげて異様な舟が走る

淡々として、また快適に

去来する風采である

海辺幻想

入江に青い丘をとりかこんでいる

初夏の真昼のさわやかなひかりと

あさいみどりいろに埋もれて

クリームいろの建物が小高く並んでいる

瀟洒な熱帯港市だ

みどりはいともすゞしく

目に泌むばかりなのに

海辺を青い二階の電車が走っている

白い服の人たちが寛々と歩いている

風は海の方から吹いて

浮き浮きした音楽が

どこからか聞えてくるではないか

白雲のごとく

白雲よ

縹渺たる波の上逝く

吾等おんみの友だ

海は石油をながしたような

おもい熱帯の海となり

船は湯垢の廃れた匂いがする

皮膚は熱風に塩たれた

のがるゝごとくやすらかに

北回帰線を越えてゆく

シンガポールにて

蒸暑い熱国の市街を訪れた

翠黛は愛すべきも

すでに困憊の情は古びた映りのように

白っぽく漂うている

人力車曳いてやせとがれる男たち

蠅のごとく群がり

どろぼうと裸足と果実の皮に満つ

私はカルカッタより来れる

強壮なる印度人と語り

君は君が雑貨を商う露店に

ガンジー氏の写真を飾る

君はアフリカダーバンをなつかしみ

私はダーバンを越えてゆく

吾等友愛をかんじて握手した

君が淡泊なる善意を

私はいつか忘れはてるだろう

即ち仰いで空を危うみ

勿々に君と君が儲ける町を辞した

印度洋にて

印度洋は

涯てもなし

ひねもすをどよもしやまぬ

青い波

波はものういさまに

うねりかえり

わが軽き眩暈をはこぶ

雲はわた毛のごとくかさなりて

遠く目路のはてにみじろがず

夕映

空はありありと

海のはてに一線を劃し

なんといううつくしい色合であろう

得も言われぬ平和な感情を浮かべて

空いっぱい夕やけであった

人々は甲板にあつまつて

うつとりと夕映にながめ入った

明日はアフリカが見える

そのことが人々の思いをたのしくしていた

ケープタウンにて

落日の坂で、少年たちは

いつまでも手を振って私を見送った

服装は貧しいけれど

聡しげな黒瞳と

うつくしい陽焼けした皮膚をもつ異国の少年たち

彼等を愛する思いに満ちて

私は坂を下った

北方の追想

北方の追想

私は、そこに野生する

葱の辛みを知っている

私は、その流れにすむ鮠の児の
生きたまゝの味を知っている

あんずの樹の梢に石を投げると

どんな風に

熟した実が落ちるかを知っている
皮ごとの茄子や胡瓜を、少年らが
どんなに好むかを知っている

私は、雪を割って出る

露のとうのこゝろを知っている

私は、その河原にどんなにたくさん

光り石があるか知っている

菜種の花ごろ、北から南へどんな風に

白い雲がながれるか、私は知っている

秋には、稲刈の了えた水田の上を

どん風に渡り鳥が渡り

どんなに元気よく石油発動機が

村々にとどろくかを知っている

おゝ私は、その草の、木の、虫共の

それから、夕日をながめることの好きな

少年たちのこゝろを知っている

幼 年

我がいとけなき日を

吾がいとけなき日をたとうれば
碌々として石を積めるがごとく

また、黄盈の月

かなたにさしのぼる風情なり

ふるさとの野へ

ふるさとの野へはうつくし

ふるさとの野へに銀いろにやなぎの花咲く

ふるさとの野へに郭公の鳥啼く

ふるさとの野へに黄翅なるばつたとぶ

ふるさとの野へにあたたかに雪ふる

白い記憶

すももの花が白う咲いている

小板橋のほとりの家

大勢の人たちが佗しげにくらしている

大きな飯櫃の傍らに大きな三毛猫がいる

その三毛猫と川原の漁小屋であそんだな

髪を刈られるときはいつも泣いた

癩が強くて村中に泣き声が聞えたげな

白い路

青い山

そんなにもあかるい景色が

どこか遠い国のひとごとのように

展けてくる

はつきりと幾つものことが数え得られよう

捉えようとすれば

たちまち記憶の涯てへぼける

白うぼける

母さん、母さんの胸だ

いやすももの花が咲いているのだ

吾れは五歳にてありければ

おちぶれて、かなしきことや知るならん

山峡いのふるさとの村より

ちちははと兄姉びとと

家の具を積みて舟をながし

舟つきたるはうすぐらき町の外れにて

雨しよぼしよぼと降りいたり

幼き歌

かの川べ

遠く、白きみち

はよも現れよと希いぬ

明日も行き

やなぎの芽のなめらこき

女の子に折りて来んとこのぞみぬ

雪融くる

雨垂れの音数えつゝ

たのしくねむりぬ

遅々春日

うつらうつらと

なに思いくらしけん

とりとめもなく

うたのきれを諳んじ

ことごとくに騒きつゝ

たちまちにわすれさりて

はるはおさなくうつりたり

ほうき星

おそろしきは

星くらきよるの空

かのくらきに

かたちすさまじきたましいどももすむなるか

吾れ慄えつゝ、母上によりそい

妖しげなる尾を曳きて

ほうき星はしるを見し

鉄橋

お母よ、行てくるで

やさしい母に断わって

ひとりが好きな子、ひとり遊びのたのしさに

はてどこへ行こうの

裏の乳屋へ牛見にかい

宮跡の掘立小屋へ

乞食夫婦のさくら作り見にかい

いんや、あの土堤つたいに鉄橋の方へ

歩いて走って、また歩いて

付け紐すがたのちいさい私

鉄橋のあたり来てみたらは

田甫浅黄でひろびろと

よしきり茅野でべちやべちやと

線路は光って昔風のうねりのむこうへ

立札に書いてある

きしやにちゆういすべし

あゝそう、下りの汽車は未だ采ぬかな

しぐなるの肩が下っているな
線路に耳当てじつときいている
うつぶせの小さい胸に
なつかしい遠い韻き

鉄橋のあたり
白い雲も流れていました

春は

春は、裏町のみすぼらしきにも
雪とけみちのあなたより
飴や爺のらっぱ鳴る
母よ
飴買うてくだされ

朝のかまど

吾が母上のやさしさを何にたとえん

そは吾が幼きくせの

早起きして焚きもつくろう朝のかまどの

黄いろき薪火のあたたかさにもたとえん

母上は長ききせるくわえて煙草のみたま

吾れは母上と並びてかまどつくろい

こゝろかぎりなくのどかなり

春日行

青草の土堤がつゞいて

その土堤上に白い路

とぼとぼと父の後についてゆく

なんてちいさい

尻からげの私

五十嵐堤です

早瀬に光る鮎の腹ほら、また光るよ

お父（とと）

たんぽぽ、たんぽぽ

たんぽぽをとろう

早う采なよ

でもたんぽぽを

山はむらさき

ふるさとの山です

もう直きだがな

はら、あの山の麓が猪之が原だがな

ほんにか、うれしや

たんぽぽ持って

父の前手に駆けてみる

なんてちいさい

尻からげの私

むかし父に従いて

たのしく故里を訪いしことあり

ふるさとの

ふるさとの

山はむらさき

水はあきらか

戸毎にその水軒に引きて

蟹、蝦、鮠のちいさい子など

その迅きながれの砂利に棲むはおもしろ

兄弟

兄は巧みに明笛を吹き鳴らし

弟私は足もて鼓のごと

破れ障子を打ち叩く

吾等がいとけなき

くらしまづしきをにくむことなく

ただなにものか反抗のこゝろ燻り

もの憂きさまにふるまえり

憤 怒

母上に叱らるゝことのかなしや

野良犬のごと縁の下に潜りて出でず

日暮れなば

いかり燃えたちぬ

少年

発生

どぶの中に

赤みゝずがうようよといた

干乾びて掘りあげると

蛭が出て来た

裏町の路地の奥に

貧乏たらしいくらしであったが

気にかゝりもせず

らんぷをみがき友だちを愛した

友だちは私に綽名をくれない

毎朝逸早く登校し

教室に迷い込んだ梟や雀鷹を捕えた

階段の最上段から跳び下りる勇気をもった

町中の犬の名を暗記した

青大将を素手で上手に捕えたが

決して殺さなかつた

竹石石造との約束を果すため

母より五厘玉をもらい

半里離れた彼の家へこんにやくを買いに行つた

かゝることは友だちの称讚を博した

松次

松次は乱暴者なり

松次は最も強し

松次は友だちを脅し

友だちのもちものを奪いて

吾れに貢ぎたり

吾れは悉く虱でぼろぼろの

馬鹿の弱虫の与吉に与えたり

好まず

吾れ教師に愛さるゝことを好まず

吾れ女の子の鉄火なるを好まず

吾れ色あかき鳳仙花を好まず

かゝることに身の毛よだちぬ

秋祭り過ぎぬ

秋祭り過ぎぬ

かの軽業小屋にて見たる

とんぼがえりの男、女ら

その日ぶうぶうと真鍮らっぱなど

吹き鳴らしいたる楽隊士ら

すがれ酸漿のごと褪せしもの纏い

そぼそぼと語らいつゝ一つ傘にかたまりて

雨降る中、停車場の路を行けり

さるはかなし

吾等がまぼろしのしやぼんの玉は
吹けど吹けど

はや七彩の華のいろにふくらまず

集いて

その日よかりしこと語ろうのみ

純白賦

吾等がいとけなきむねには

真白なるころもつけたる

真日なるころの少女らのみ住めり

吾等つねにきよらかに

また雄々しげにふるまい

ようやくたけのびしならば

まずしくけなげなるひとりの少女を愛し

世にもたぐいなき幸を与えてん

吾等そを思いてなみだながれたり

羅紗売り

今日もはるばる陽が落ちる
こゝは日本の北の野へ
吹く風さえもしみじみと
羅紗は売れたか
疲れた異邦人よ

橋のてすりに借りかゝり
まなこやさしく夕日見る
いまぞ菜種の花ざかり

哀しき春

春なれば

まつりの宵に花咲けど

きみうつくしくよそおいて

吾れとあそはずなりにけり

やしろ三めぐり

こなたへ抜けて

さつとあげたる電気花火

そのあかるさにたたずみて

あわれ友禅のひとの

なつかしげなる

眸（め）に会いぬ

花火なげすて

ひとりのがれぬ、さくら木の下

知るやかなしき春のころ

ゆすれば花ふりちりぬ

ひとはみな

大人びてあそべぬものか

我が眸は

吾が眸は野性に満ち

吾が頬風になめされぬ

吾が微笑するとき

花粉散り

吾が疾走は光りを曳けり

さあれ孤独は早も

吾が前額に滲みいでたり

洪水記

雨ふりつゞきておおみずとなりぬ

人走り、半鐘鳴り

ついに川の堤破れて野も町も水に浸り

人々筏を組みて往来す

堤防の高きにのぼり見れば

青き虫、蛇、野鼠のたぐい

数かぎりなく梢に着き居り

かなしく思えり

水減きて吾等川を漁りたるに

川底に泥探まり

鯰、泥鰌などぬめらこきもの数知れず生まれいし

だいまよう

だいまようは

その青きからだして

あたま三角、目は白

草なかに捕えんとすれば

脆や片脚落したり

かなしみこらえず

あたまもぎ、羽ちぎり

泣きつゝ

夕日の中にうちすてぬ

註　だいまようは越後蒲原あたりの野にすむ。いなごの数倍の

大きさ、行動不敏

野 鳩

雪消えて

路乾きぬ

くらく静かなるゆうべ来りて

こゝろたのしくはづめり

かゝる宵ぞ、あかきつばきの花の咲ける

その繁みに宿りて、野鳩の夫婦

しづかにねむるなり

少女よ

忍びて見にゆかん

夕ぐれと私たち

雑木林のむこうで火花が散った

音次は柿の木のでっぺんでラツパを吹いた

政太郎は颯々と抹茶を刈りとった

吾市は胡瓜の刺を落して尻から嚙った

私は魚馬の中を彼等に覗かせてやった

友情は夕風のように素朴であった

私たちは口笛で明日を約束した

口笛は脈々と大豆畑を越えて行った

夕ぐれの思いは水のようにひろがった

晴 夜

晩秋のゆうぐれ

私たちは水田の畔で籾殻を焚いた

荒涼たる湛水に鯉魚跳ね

鳥群は影もなく

颯々と平野の彼方に落ちた

燻る炎をひろげながら

野鼠のように敏く

私たちはうつくしい予感に慄えた

幻想は目のあたりのごとく

溢るゝ星の下に

彼方なる都会の深紅の炎焼を見た

明滅する燐光のごとく星たちの擾乱を信じ

それらの生命のろくろくと腐れ落ちる韻きを聴いた

砂漠は永遠の虚無につらなり

華やかな死滅の世界を彷徨した

北方の晴夜は露滴に滋く

私たちは濡れそぼちつゝ
神秘にしてうつくしい奇異への期待に戦いたのであつた
が
それらの夜々も
すべての少年の日のごとく
事もなく過ぎ去つた

藤の花咲くころ

五月、たのしい祭りも過ぎるならば
藤の花むらさきに咲きのぼる
蜜蜂はぶんぶん光りと香に痴れ
高く高く胡桃の樹にからみ咲きのぼる
藤の花の下で私は薪を割る
斧ふりあげ汗をながす
私はロビン・クルソーを羨まない
世の中へ出てさまざまなことをやってみたい

印刷や建築やまた行商など

それから投なわも

ひそかに肩筋に触れみてほくそえむ

夕べとなれば

ひとりたのしく停車場の路を辿る

そはいつも明るくさわがしく

見知らぬ人に満ち

やがて夜行列車はごうごうと

嵐に行く火箭のように走り着く

私は夢想する、彷徨える叔父よ

追放されし兄よ

異人のごとく丈高く眼なつかしく

大いなる鞆を携えてこの星降る夜

ふるさとの停車場に降り立ち

私を抱き、私に物語り

遠い邦の品々を私に与え

私をその邦へ連れ去ってくれないか

またひとりの美しい少女よ

黒くなめらかき服をまとえる少女よ

この星降る夜、この北の町に
さびしきさまに降り立つならば

私はその重い荷物をはこび

その尋ぬる家を教えやり

そのもとむるまゝに友だちとなろう

あゝ五月

青みゆく夏を迎えてくさぐさなる幻想の華咲く
やがて藤の花散り

そがみどりたちまちうつとうしくなりはつるに

青大将呆けてゆるやかに垂るれば

夜な夜なを睡りの夢に

見知らぬ兄と、寂しく美しき少女と

果実の島をめぐる

校庭

校庭なればや、ぽぷらの樹

高らかにしげりて並びたつ

そが下にくろうばの菓青く敷きて

われらぽぷらの樹の高きを愛し

そが蔭にくろうばの褥に臥してねむりぬ

またその幹に白き潜芽を掘り

角大いなる甲虫をたづねたり

やがて春到り

らんまんと桜花ひらけば

われらその下にねむりてやまず

与吉

白痴なる与青はかなし

おそ秋のとあるゆうべ

吾等刈揃えたる稲をはざ木に掛けいたるに

大いなる月のぼれり

与吉そを眺め吾れを思いなつかしくなれりと

町より走り来れり

月あかるくて与吉稲架けをはたらき

吾等柿と秋ぐみの実を与えしかば

よるこびて帰りゆけり

与吉よ町にて朝夕新聞を配達し

しあわせにあれよ

註 越後蒲原地方にては刈稲の乾燥のために畦畔に植えられた並木に

綱を張り、昼間刈り取りたる稲を概ね夜に入りて架け並べて乾燥す

る。その目的に使用する並木をはざ木又ははぜ木と称す。私は農家の

子ではなかったが、百姓の仕事が好きで親友の音次の家でよく宵はざ

を手伝った

青
春

路地の人々

ことごとくまづしければ

この裏町のせまきに住む

日毎に孜々としてひらめかし

魚族らの卵（こ）を放り殖やすごとく

あまた生みそだてたり

庭

裏町に住まいするは
つらしというものか

裏町くぐりて出づれば

野べひろくひらけたり

野べに草滋り、黄いろきばかぐさの花咲けり

なにひとごとを羨まん

そは吾等がはばからぬ庭なるを

子らよ野べに行かん

黄いろきばかぐさの花摘みてあそばん

野菊

野菊のはなを好むという

少女はいちばんいゝ晴衣を着ても

町のお祭りに行かずに

たったひとりで草はらに

そのはなをあつめて居りました

約 束

少女らと約するはかなし

少女らそをひそやかにまもりぬ

されば少女ら海に行きて帰りしとき

めづらしき貝殻など拾いて吾れに贈りぬ

また少女ら山に行きて帰りしとき

うつくしき花びらなどおして吾れに贈りぬ

あわれ少女らかゝるうつくしきこと

大人びやかにふるまいたり

草いろもて

草いろもて

都会をぬりつぶせよ

その街々に麦を植え

緑野の感情を

まつすぐに吹き通せよ

青い雨

雨がふる

青い雨がふる

こすもすの苗にふる、いんげんの蔓にふる

胡桃の花にふる、榛の並木にふる

仔牛の瞳にふる、雀の羽根にふる、尼僧の笠にふる

朝をふる、午後をふる、宵をふる

郭公のねむりをふる、木啄きの恋をふる

ふりやむとなき五月の雨のやるせなさ

こゝろもなにかぬれ青み

傘もってちまたの灯りにいでたてば

少女らなつかしんでわが名を呼ぶ

朝顔

私は朝顔共の蔓を伸び放題にした

朝顔共の蔓は雑木にからみついた

夕ぐれ、私は朝顔共の根元に小便した

蔓はどンドン伸びて

雑木の頂きまで昇った

枝蔓は屋根の上を這い廻った

やがてむらさきと赤と混って

らんまんと朝顔共の花が咲いた

毎朝早くから蜂共が蜜を吸いに来た

少女たちが道を通りながら褒めたゝえて行った

はたちごろ

たそがれては

ものみなはかなくやるせなし

さればほろびざる愛をもとめんと

ちまたにさまよいでたるに

ともしびあまりにあかるくして

かげにうれえんすべもなく

おんなあまりにうつくしくして

つゆへりくだることをせず

かなしみてかへる

あわれはたちなる

野葱と菜種

野葱のひともとを摘んでみよ

野葱の匂いが目鼻に泌みるぞ

菜種の花をゆすってみよ

菜種の花粉がこぼれるぞ

なんとあざやかに

こゝろなきものを

こゝろなきものを樹木というや
こぬれはたかくしてなごめるふりを
ゆうべの空にうつしみよ
むらさきがかかるその空に
ろうたけくしてなみだながるゝ

けら

けら虫は

もろ手搔きて土を掘る

土を掘るくせの

けら虫さむしからめや

びろうどの可愛ゆき羽根着て

一念わがともしびを抱きに来れり

赤きカンナの花咲ける村

河よりの帰途

とある村に入りぬ

そは赤きカンナの花咲ける村

陽ざかりのふかく

樹に物憂き翳をつくり

にわとりのその花にあそべるありて

かくて目しきりに痛み

過ぎ去らんとするとき

樹に蟬の声止みがたく

家々は痴呆のごとくねむりたり

決別

渋柿の幹をむしりつ

しばらくの別れ惜しみぬ

ふるさとを遠くはなれて

はたらきにきみゆくという

男装の乙女のごとく

今宵手を執りてあそばさず

よもぎいろおゆびに染みて

春来なばひとを思えと

渋柿の幹はほろほろ

夕まけてかなしかりけり

東南の風が吹く日

東南の風が吹く日

空気が湿度をなくして

山脈の翠りが近く明るい

こんな日、私たちの感情は植物共のように

白っぽく埃りを浴びてだらける

こんな日はあの怠惰な蛇共が

だらしく草むらにとぐるを巻いているのだ

河の沈床のあたりでは

無数の蝦やみごいが浅瀬にあそび

岸辺の柳の蔭の軟らかな砂泥の水底に

おろかな鯰共がゆっくり呼吸づいているのだ

それらぬらぬらしたものを

草むらの中で

或いは重くよどむ水圧の中で

素手でつかまえる生温い感触をさえ

私たちは私たちの倦い肉体に

まざまざと感ずるのだ

これはたまらない誘惑である

野性に充ちて

野にゆく

河にゆく

与吉

白痴なる与吉が泣く

与吉が泣く

泣く

もろ手放して

桶の漏るごとく

天も地も

六禄と

轆々と崩れよ

見よ！

聞け！

白痴なる与吉が泣く

朝の宝

障子に陽は映らないけれど

あかるさが室にこもる気配

母の注いだ渋茶をとりあげて

父は静かに味わう

そのまゝ手に支え

ゆらゆらと立ちあがる湯気を見つめて

じつと俳句を考えるらしい

母はたばこを喫んでいる

甘萩の刻みをつまんで長い煙管につめ

炭火に吸いつけて面をあげる

上唇の少し凹むは前歯の欠けたせい

深々と吸いこんで静かにくゆらす

障子の白さに目を走らせて

きようの天気を占うのか

おゝ父よ、母よ

ありがたいことに

また春が来ますね

あなたと私

あなたはやさしく私の前に座っている

手をさし伸べると

あなたはいともしたしげに執る

あなたは私のゆくところはどこへもゆくという

すべて私は不思議に思う

そもそも私は男というものであり

あなたが女というものであるとは

呆れはてたことではないか

ひとみ

この日まし深まざる愛を
吾れはもの言わず
きみがひとみに
そを映せば

きみがひとみ
きみがひとみ
吾れはみづからの思いを
きみがひとみに知る

はなびら

はるの夜
はるの夜
あゝ月ものぼるようだ

ひとときの風情は

いま

ほのぐらいあたりに

揺々として

私の上に

はなびらは匂う

蕩々として私は

あなたのしだるゝ思いをうけとめる

糸魚を釣る子が

糸魚を釣る子が田螺をとっている

田螺をとる子が目高を掬っている

芹を摘む子がよもぎを摘んでいる

よもぎを摘む子が葦茅を抜いている

うんかはそこいら中の日当りでつるんでいる

永日唱

葉洩れ日の

ありやなしやの風にうつろう

ひるすぎの幽けさ

ほうほうと呆けるは芥子のはな

いゝえお母さん

世にもうららかな

あなたの緑蔭のおすがたです

第一の収穫

晴れた日

人々は菜種を収穫した

畑中の径に藁筵を敷いて

その上で熟した菜種の莢を打って

菜種をはじけさせた

それはていねいに袋につめられて
家へ運ばれた

殻はすぐその場で焼かれてしまった

梅雨も迫っているのだ

人々は汗をながした

柿の新葉が目も覚めるつやつやしい茂りだった

人々はその下でやすらった

子供らはそんなとき

少しはなれた小川のあたりへ

ぐみの実を採りに行った

まだ半ば青いのを我慢して

渋そうに食っていた

畝には株が干乾びて残った

畝間には

もうそれが新しく畝を形づくるために

手際よく大豆が蒔かれて

芽ぐんでいた

梅雨明け

この植物共の恣いまゝに伸びた
ありさまが

膨軟に湿らされた土の感触が

七月の戸外のあざやかな光りの中で
私を鬱陶しくする

生活はみだらになりすぎた

河岸には無数の鯉や鮒の児が生まれてしまった

夏

麓は落葉松の林

秋にはこのあたり紫しめじが生える

登りつゝ潜りぬける

湿っぽい粟の植林

それから頂上

低い女性的の山であるが

青空がひろい平野の展望をつゝみ

整然と直線で区切られた水稻耕地が

緑繁る部落又は白聖の町を囲んでいる

白銀のような河流がうねりつゝ

遠く丘陵のつらなりのなかに霞みこむのを見る

それらはすべて発育の過程にあり

真夏の素晴らしい濃緑と、白い光りの氾濫が

しかし彼等は別の叫びを挙げた

彼等は早くも足許の勾配のはるかな下に

音たてゝ蒼く渦巻く河流と

その岸边の磊磊たる岩石の寢床を認めた

新しい冒険のよろこびに彼等の魂は喘ぎ

石くれのように微風を捲いて断岸をすべり

水座りをあげて流れにとびこんだ

かくて勇氣ある獵人も恥ぢよ

その最も深く最も危い淵に潜って

まるで光りの泡のように

魚族の遊泳を追いかけた

父

あかるく爽やかな夏の朝の陽差しであった

父はその路を歩いて行つた

並樹はさわさわと葉をゆすり

その蔭を拾うて太り加減の身体をやや曲げて

ゆつくり歩いて行つた

もう喜寿の齡なのだ

少しばかりの風呂敷包を持ち

ふくらっぽく三尺帯を子供のようにお尻に下げて

隣村の句会へ撰者に招かれてゆくのだ

こちらで私はそれを眺めていた

それは実にあかるい景色であった

このすがたは父のためにありがたいことだと思つた

父は坂をのぼつて丘のむこうへ見えなくなつた

私はもつと父を眺めようと思つて

小走りに丘をのぼつた

そこからは並樹がなかつた

陽かげのない畑中のひろい路を

父がゆつくり歩いてゆくのが見えた

童話の一頁

ほのかに昏れのこる

空の涯て

星一つ連れ

やさしく、古典のようにかゝった

黄金の三日月

地上に

ものみな黙し

おのづからなる調和の象（すがた）にうづくまり

樹々は静まり

人々は幾歳かの漂泊を終ったひとのように

嘆息を洩らす

おゝそして私の少女は

きらめく星のように

うつくしくやさしい

私の胸は

愛慕の想いに盈ち

私たちは手を執って

童話の黄金いろの頁を

しづかなるその小径を逍遙する

鼠が関

北の海べに来て

鼠が関のあたりなど

さびしき景色なり

夕日はさむく粟島に落ち

その名知らぬ黄いろき草ばな

へんぽんと風に吹かれたり

芽

すずめその糞をたれて

土となせり

自くなめらかなる芽

そを出でぬ

あわれうつくしきこと

初雪

初雪ふれる、

この朝のまづしさに

みそさざい来啼けり

ちよんちよんと啼けり

みそさざい暗く里に

われ住めり

からす

灰いろの空を低く

からすが飛んでいる

かなしげに

ふるさとの雪野の上を飛んでいる

横田恭平の詩と人と

大 浦 文 雄

詩に限らず、―その作品に接して作者を思いえがくという、別の言葉で云えば、その作者はどんな風貌の人だろうか、と思わせる作品とそうでないものがある

前者の作品は、如何なる傾向、如何なる手法にもまして、その内部に作者の全人格的な、その人の生き方そのものから発した、ひびきをもつ

私が横田恭平の詩を始めて新聞紙上で読んだのは（現在の日本人コロニアでは、詩の発表機関は新聞以外には殆んどない）今から十数年前で、あの終戦後の社会思潮の混乱と、自分自身の年齢的な人生の動揺期の重なり合った時に於て、大地に生えた槻の樹のような強靱な、それでいて稍たかくわたる風を思わせるひびきをもった詩に接した時の感動は、おそらく私の一生の中で、読書を通じてめぐり合う、数少ない「邂逅」のよろこびの一つであった

詩は理解出来るものではない

詩はただ共感によってのみ真の味わいを汲みとることの出来るものだ―

この言葉が自分のものになり切ったのは、次々と発表される氏の作品を新聞の活字の奥から引出して、自分の心に

対決させてゆく過程に於てであった

長い期間に亘って接してきた作品から受ける感銘の深淺は、自分なりにあった。しかし、そこには常に、生活をふんまえてその深い奥を見つめている生きた人間のすがたがあった

横田恭平の詩の本質を一言にして言えば、「肯定の文学」であると思う

しかもそれが「今」に甘んずる軽い楽天的なものでなく、過去と現在と未来の重なりあった重厚なイメージの原板の上にうつしだされる作品は、時としてかたい抵抗の構えをもつ、それはまた、どこともなく吹きあたる「虚無」の風に立つ姿勢でもあり

倦怠の翳りをふみながら長い人生の道を歩いてゆく一人の人間の姿でもある

多年に亘る作品を通じての心の交わりを経て、はからずも私は横田氏と同じ村に住む運命をもった。あたかも氏の作品の、及び生き方の一つの特徴をなす放浪精神の一応の定着時にあたっており、その作品内容も私たちの住むスザノ市周辺の風物に対してしみじみとした感情に彩られて来た時期であった

そして更に一つの偶然が生まれた

今から四年前、八月初旬のある朝、急に春めいた自然の中で、長い冬の沈潜から醒めきれぬ自分の心をもてあましながら、私は柿の枝の剪定をやっていた。今晚あたり村はずれの横田氏を訪ねて、心の準備をする間もなくいきなりやって来た今年の春について語り合おう、などとふっと思いながら―

突然背後で声があった

「やあ、すっかり春になりましたね」

六^キの道を歩いて来た横田氏であった

眼眸するどく、若芽のふきでた柿の梢を、あのくせのある顎をしやくるようにして見上げた眼鏡に、なまめいた日射しが散った。その日、私は机の抽斗の奥に永い間閉じかくしていた過ぎし日の苦悩の記録を氏に見せた

斯くして、自分だけは捨てがたいとひそかにかくし持った詩の幾篇かが、横田氏のスザノ定住後の作品と共に、共著詩集「スザノ」として出版されたのである

季節のめぐるごとにその内部を充実してゆく自然のように、氏はその後も生きることと、生きることの意味をかみしめるごとく、旺盛な作品活動をつづけている

今回現今の作品とは別に、詩集「スザノ」以前の作品集積に加え、在日本時代の初期の作品を整理して出版する運びとなったことに就て、私は私なりの新しい気持でむかえようとしている。それはコロニアという荒い風土環境にもめ

げず、むしろそこでみづから鍛えながら伸びつづけてきた詩の地下茎が、かつてその青春の日に、どのような抒情の花を咲かせていたか、という素朴な期待である

千九百六十五年十月

スザノ福博村にて

一九六六年二月十五日 印刷

詩集 感情 粗く憔悴せる

著者 横田恭平

印刷所・パウリスタ美術印刷株式会社

聖市オスカル・シントラ・ゴルジンニヨ街四二

電話 三六〇七九六七